

パリの一市民よりフランス王への建白

田川光照 訳

『パリの一市民よりフランス王への建白』は、サドがしたためた政治パンフレットのうち最初のものであり、1791年6月末の国王一家逃亡事件に際して書かれたものである。これは、『ジュスチーヌあるいは美徳の不幸』（1791）の出版元でもあるジルアール書店から出版された。

凡例

- 一、翻訳には、Œuvres complètes du Marquis de Sade, en 8 vol, Cercle du Livre précieux, 1966-1967 の第11巻に収められたものをテキストとした。
- 二、原文中のイタリックはすべて傍点で示した。
- 三、サドによる原注は、各段落の末尾につけた。
- 三、訳注は、本文中にはアラビア数字で示し、巻末に送った。

パリの一市民よりフランス王への建白

陛下、

この建白書はただ一人の人間によって草されたにすぎないとは申せ、ここに表明されたる見解は全フランス人の意向であるとお思ってください。あなたを愛する人々、あなたを尊敬する人々はみな、同じ言葉をもってあなたに語ることでしょう。それ以外の者の言葉は信じないでください。連中はあなたをだましているのです。あなたをだまし、あなたを破滅させたいと願っているのです。

陛下、あなたは何をなさったのですか。あなたはどんな行為をなさったのですか。どんなおつもりで一国民全体をこの上もなく恐ろしい誤謬の中に陥れられたのですか！

王国の揺籃期以来、今日にいたるまで、この国民が大切にはぐくんできた思いは、もし誠実が、忠誠が、信義が、地上から姿を消したとしても、国王の心がそれらを祀る神殿となるにちがいない、ということでした。この幻想を抱くことはもうできません。陛下、あなたがその幻想を打ちくだいておしまいになったのです。それもひどく残酷なやり方によって。あなたにとって光栄この上ない思いに代えて、あなたはフランス人の心の中にどのような思いをお植えつけになったか、とくにご覧ください。私たちを裏切った人間のことを私たちにどう思ってほしいのか、ご自身でおっしゃってください。その男は連盟協約の日¹に座を占めていた玉座を冒瀆することも

恐れず、国民がその男と手を結ぶと同時に、彼も国民と手を結ぶために、愛情と好感にみちた聖なる宣誓を行った祭壇を冒瀆することも恐れなかったのです。あの時は、同じ広場に集合したフランス人全員がその男の姿に涙を流したものでした

陛下、あなたはその誓約をお破りになったのです。最も不実な、最も陰険なやり方でそれに背かれたのです。最強の人であるあなた、私たちに命令を下してこられたあなた、愛情と全き統一というあのゆるぎなき思召しによって私たちを治めてこられたあなた、そのあなたが弱さゆえのおぞましい策略を用いられたのです。そして、私たちが美德のみを見出していたフランスの騎士の魂も、もはや私たちに隷属と屈従の悪徳を差し出すにすぎなくなっていました。

ああ、陛下、あなたはご自身の真の利益をつかみそこねられたのです！ あなたを主君と仰いだ国民の心情をよく察知されなかったのです！ あなたの振る舞いと言葉のとりこになっていた国民が、あなたのかつての大臣たちの政府にみられた背信に対して当然にも激怒し、あなたを見直しはじめていたのです。国民はあなたの追従者たちの不正と、好んであなたのうちに見出していた美德とを切り離しました。そして、善は王のみ心のなせるわざであり、悪は大臣たちのなせるわざである、と言っていたのです。この好意的な優しい気持ちは、あなたがもう少し我慢強くもう少し慎重に振る舞われていたなら、あなたが失われたものよりもはるかに多くのものをあなたに取り戻させていたにちがいません。と申しますのも、陛下、あなたはヴェルサイユでしか敬愛をお受けに

なっていなかったからなのです。パリで人心を掌握なさればよかったです。

あなたはご自身の身の上を嘆いていらっしゃいます。鉄鎖に縛られてもがき苦しんでいる、とおっしゃっています……。とんでもない！ 純粹で誠実な魂を持った君主なら、専制主義の虚栄よりもおのが国民の幸福を願うまでに蒙を啓かれた君主なら、精神的快樂のために自らの肉体的快樂を数ヶ月の間犠牲にすることを拒む者がいるでしょうか！ 国民の代表たちの仕事が成就するにつれて、あなたはその精神的快樂を味わうことができたはずなのです。さらに、世界で最も美しい町の最も美しい宮殿に住んでいる者が、それほど不幸であり得ましようか。しかも、今の境遇は一時的なものにすぎず、二千五百万の人間の幸福を実現するための確実な手段となっているのです。あなた以外の多数の人間の幸福を作り出すべき今の立場を不幸だとお思いなら、かつてあなたの専制主義の犠牲となった人々の立場を、ほんのしばらくでもお考えください。その気の毒な人々は、詐術あるいは錯乱した頭の結果であるあなたの署名一つ²で、涙にかきくれる家族のふところから引き離され、あなたの王国のここかしこに建てられたあの身の毛もよだつ監獄の独房に永遠に投げ込まれたのです。さらに、あなたの境遇との間には、その不幸な人々の恐ろしい境遇がほとんどの場合陰謀と不正の結果であり、しかも一般に死ぬまで続くものであったのに対し、陛下、あなたの境遇は一時的なものにすぎず、いつの日かあなたの国民の永続

的な幸福を作り出すことに目的があるという、大きな相違があるのです。

かくも大きな悪を容認なされた以上は、陛下、軽い悪に耐える覚悟がなくてはなりません。

フランス人は自由を望んでいるのであり、やがてそれを得ることでしょう。彼らはこの自由を獲得するには何らかの悪弊に身をゆだねざるを得ないと悟っております。しかし、その悪弊は事業を進める上での必要悪なのであって、昔のように事業から生じる悪弊なのではありません。私たちがみな見抜いているこの相違は、その必要悪がどのような結果をもたらしてくれるのかを私たちにまたたく間に気付かせてくれることで、私たちの慰めとなっているのです。もちろん、私たちが自らを統治する新しいやり方は、新体制から生じる悪弊を一掃するものでなければなりません。かつてのあなたの統治形態は悪弊を強化するものでした。その悪弊はあなたの統治形態に本質的に内在していたものであり、ゆえにその形態は時代を経るとともに必然的に疲弊してしまったのです。その悪弊は私たちの統治形態にはすぐわないものとなり、やがて一掃されることでしょう。こう考えることで、私たちはすべてに我慢しているのです。そして私たちに腕を差し延べている自由、私たちが待ち焦がれている何にも替えがたいあの自由が、私たちの勇気を支えてくれ、何事をも可能ならしめてくれるのです。ですから、陛下、その結果に逆らおうなどとはなさらないでください。この国民の一致した願いを暴動だとか謀反だとか吹聴することによって、ヨーロッパの人々の目に対して

この国民の品位を貶めようなどとはなさないでください……。二千五百万の人間は叛徒などでは少しもないのです。叛徒という言葉は二つの反対勢力の存在を連想させますが、……フランスには一つの勢力、ただ一つの同じ意志しかありません。ローヌ川河口からエスコー川沿岸に至るまで、大西洋からアルプス山脈に至るまで、自由という言葉は国をあげての叫びなのです。自由を享受したいという願望、それも永遠に享受したいという願望は、全員が一致したもののなのです。この聖なる願いは理性と英知の所産であると同時に、先の治世とあなたの治世における失敗によって王国全体が投げ込まれた絶望の所産でもあるのです。理性が純化されれば悪弊は存続できません。地獄の帝王の行為と同じく蒙昧の所産である悪弊は、偏見と狂信と謀議との暗闇の中でしか生じ得ないのです。哲学の炎が火花を散らすや、悪弊はその恵みの輝きによって、秋の夜の密雲が旭日の光にかき消されるがごとく、次第に姿を隠し、ついには跡形もなくなってしまうのです。陛下、私たちが恐怖におののかせたり、監獄に閉じ込めたりする時ではもうありません。崇められるようお努めになるべき時なのです。まだ手遅れではありません。あなたの魂が欲してやまない権威を回復することは、いまやあなたの振る舞い一つにかかっているのです。あなたがご自身の心の声にのみ耳を傾けようとなさっていたなら、あなたはとっくにその権威を取り戻されていたことでしょう。そして、あなたの王冠を貶めたとおっしゃるあの国民は、あなたが気付かぬ間に再びその王冠をあなたの額の上に載せたことでしょう。

今でもそうなるうとしているのです³、陛下。それも、私たちのような国民の真の君主にいつそうふさわしく、いつそう美しい王冠をあなたにお返しすることでしょう。統治すべきはあなたなのであり、もはやあなたの大臣たちではありません。あなたは法に基づいて、あなたの臣民の心に基づいて、統治なさるのです。おお！なんとすばらしい王国でしょう！それなのに、陛下、あなたはそれを失うことをお望みになったのです。こともあろうに私たちから逃げることによって！いったいいかなる動機からそのような行動をおとりになったのですか。しばらくそのことについての検討をお許してください。あなたは亡命するためにフランスを出ようとなさったのでしょうか。ヨーロッパのどこか名も知れない片隅でひっそりと暮らすおつもりだったのでしょうか。この推測はあまりにも弱すぎます！あなたは武器を手にしてフランスに戻り、死体の山を築きながらヴェルサイユに帰還しようと思っていなかったのではないですか。そうだとすれば、どれほどの残虐、どれほどの血をあなたの手はまき散らさねばならなかったことでしょう！と申しますのも、陛下、私はここで全フランス人を代弁して偽りのないところを申し上げますが、あなたのかつての専制政治に見られた悪弊が復活するくらいなら、死んだほうがましだと思わないフランス人は一人として、ただ一人としていないからなのです。フランス人はあなたがまいた悪弊にうんざりしてしまったのです。否、打ちのめされてしまったのです。もうたくさんだ、と思っているのです。それでも信義をなくしてはおりません。あなたもご存じのように、

信義は人間の心とりわけフランス人の心の中で最も旺盛に働いている感情なのです。

もし私たちがいま弱気になったとしたら、私たちを注視している世界の諸国民から、いったい私たちはどのような目で見られることになるのでしょうか！ 私たちは物笑いの種になるばかりか、なぶりものにされてしまうことでしょうか。断じて、陛下、私たちは弱気にはなりません。それはできないのです。あなたが統治なされたければ、相手は自由な国民であることを肝に銘じてください。あなたの立場を決定し、あなたを元首に任じるのはその国民なのです。あなたを玉座に就かせるのは国民であって、かつて人々が心弱くも信じていたように万物の神なのではありません。この最高存在の目には万人が平等なのです。人間に蟻の女王を見分けることができるでしょうか。神に人間の王を見分けることができるでしょうか。そういうわけで、あなたの栄華はひとえに私たちの所産なのです。それにふさわしい振る舞いをなされれば、あなたはその栄華をいつまでもお保ちになれるでしょう。そうですとも！国民の愛を受けて元首たるほうが、運命に従ったまでということでは暴君たるよりは、千倍も自尊心を満足させることができるのではないのでしょうか。あなたは王家に生まれたということだけでフランス国王におなりになったのですが、フランス人はもうそのような国王を望んでおりません。それでもまだ、あなたの振る舞い次第では、あなたご自身の人格によって彼らの元首となることのできるのです。その場合、それは彼らの愛の所産であるということになるでしょう。

なんという違いでしょう、陛下！ あなたの繊細なお心でそれをお感じ取りください。ですから、この統治の仕方を選び取り、偶然の賜物でしかない統治の仕方をお捨てください。あなたを高く評価し、あなたを愛するに違いないこの国民の何ものにも替えがたい心情を汲み取って、あなたを取り巻いている腐敗した廷臣や、信仰に凝り固まりあなたを惑わせる僧侶といった連中の、策を弄した卑しい進言に耳をお貸しにならないでください。

陛下、あなたは過ちを犯されはしましたが、その過ちを償うことによって、記憶の女神の神殿の中でティトゥスやヴェスパシアンのような皇帝たちの傍らに座を占めたいという望みを、まだお持ちになることができるのです。あなたがなされたような振る舞いによっては、あなたの名前は、カリギュラやヘリオガバスのような皇帝たちの名前と同じように、恐怖と憤慨の念を起こさせるにすぎないものとなったことでしょう。

あえて申し上げますが、陛下、あなたが破廉恥にもお逃げになった日、すべての人々の表情にはそのような気持ちしか表れていませんでした。あなたにとっては怒りの表情が表れていたほうが百倍もよかったと思うのですが、残念ながら！ 軽蔑しか読み取れませんでした。人々はあなたの武器を奪い取り、あなたの名前を消し去ったばかりか、あなたの祖先たちの彫像を破壊せんばかりでした。そうならいたら、墓の奥からアンリがあなたに叫んだことでしょう。裏切り者め、これはお前の仕業だ！ と。あなたの帰還がもう一日遅かっ

たなら、あなたは恐怖の対象となるどころでした。逃亡の前日、芝居〔原注〕の最中に、すべての市民があなたに対して抱いている愛を描いたたった一枚の絵によって、万雷の拍手をお浴びになったあなたですのに。ところが、陛下、いかなる所行がたった一夜のうちにかくも違った印象を生み出したのでしょうか！ ご自身で言い表してごらんなさい。そして、それ以上に軽率で罪深い所行があり得るとお思いかどうか、おっしゃってください。

（原注）イタリア人劇団による『ピョートル大帝』⁴の歌謡の最中。

すべての人々の心は、あなたが帰還されるとの知らせを聞き、再び希望を取り戻しております。あなたを許す腹でいます。人々の言葉に耳をお傾げください、陛下。私たちがだましたのはあなたではなく、あなたこそがだまされておしまいになったのだ、と申しているのです。今回の逃亡はあなたを取り巻く僧侶や廷臣の仕業なのだ、あなたは惑わされておしまいになったのだ、その連中がいなければあなたは逃亡などという計画を思いつかれなかったに違いない、と申しているのです。このような気持ちをおとらえになって、陛下、あなたが怒りをかき立てておしまいになった人々の心を再び掌握なさってください。間違いなくおできになります。逃亡などという企てをあなたに進言したのがあなたの運命の伴侶⁵であることは、確実すぎるほどに確実なことのようには思われますが、そうだとすれば、今後はあなたの伴侶をフランス人の復讐にさらさ

ないでください。彼女と袂を分かってください。彼女はもうあなたに必要ではないのです。彼女を祖国に送り返してください。祖国が彼女を手放したのは、その祖国がいつも引き起こしてきた恐怖という破壊的な毒を、いっそう長期にわたっていっそう確実にフランスの上にしたたらせるためだったのです。私たちは彼女の出立を喜んで見送るでしょう。私たちの誰一人として懐かしむ者はいないでしょうし、誰一人として引き止めはしないでしょう。私たちは、彼女が女性であり、またその祖国が悪かったためだと見なすでしょう。この犠牲をお払いください。これはあなたの幸福と平穩に役立つことなのです。フランス人の愛をお取り戻しになれるでしょう。その愛はあなたご自身の心にしがたって行動なさる限り、当然失われることのないものですが、あなた的人格が、ある種の人間の卑劣さや悪意によって簡単に御されてしまう道具にすぎないものにでもなれば、その愛はたちまち憎悪あるいは軽蔑に変わることでしょう。

あなたは、私の言葉遣いから、私が王政と君主との敵であるとお思いになるかもしれません。いいえ、陛下。私は決してそのような者ではありません。この世で私ほど、フランス帝国は一人の君主によってこそ統治されねばならないと、心の底から確信している者はいないのです。とはいえ、その君主は自由な国民によって選ばれ、法に忠実に従う者でなければなりません……。唯一法を發布する権利を持つこの国民の代表たちによって制定される法に、従わねばなりません。と申しますのも、主権は国民にのみ存しなければならないので

あり、あなたが享受される権力は委託された権力にすぎず、あなたにそれを委託する国民の繁栄と栄光とを高める以外の目的でその権力を行行使することはできないからです……。もうやめます、陛下。あなたが模範となって、あなたの同時代人たちを啓蒙し、あなたの後を継いで玉座につく人々に、彼らが光栄にも統治する国民を尊重するよう教示なさることを、願ってやみません。あなたの後継者たちが現下の恐ろしい教場から、自然の法に基づいて自由かつ平等たる人間によって委ねられた手綱を彼らが手にするのは、船長から任されて舵手が舵を握るのと同じで、彼らは自分たちの操縦の仕方について、舵手の場合と同じく神ならびに人間を前にして永遠に責任を負うことになるのだということを、しっかりと悟ってくればよいのですが。

¹ 1790年7月14日の連盟祭を指す。パリの国民衛兵司令官ラファイエットが祭壇に登り、「私は国民、法および国王に対して永遠に忠誠であること、国民議会によって制定され、国王によって承認される憲法を維持すること、不滅の愛のきずなによって全フランス人に結ばれることを、ここに誓う」と宣誓し、つづいてルイー六世が自席から、「フランスの王たる朕は、憲法を維持し、法を施行させるために、国家の基本法によって朕に委任された権限のすべてを用いることを、国民に誓う」と宣誓した（桑原武夫編『世界の歴史（10）』中公文庫、昭和50年、174―175頁）。なお、この祭典にはサドも赴いている。「私は一番よい席にいましたが、それでも六時間にわたって、雨を体に受けずにはすまされませんでした。このような状態は、すべてを混乱させ、神が今しがた自分は貴族主義者だと宣言された、と伝えているかのようでした。これほど整然とした祭典はあったためしがなく、これほど波乱のない祭典もあったためしがありません。大砲によって一人が殺され、二人が負傷しましたが、それも不手際によるというわけでした、それでチョンです。けれども、団結を確立するはずであったこの祭典は、争いを生じさせようとしています。以前にもまして不穏な空気が支配しているのです。国王は祭壇に行き行って宣誓すべきだった、と言うのです……。なんというつまらない言い草でしょう！ いったいどこでその宣言をすれば、国民の代表たちの中央でなされるよりも、一層神聖かつおごりかなものになるというのでしょうか。このような揚げ足取りは、内乱しか望んでいないオルレアン派から出ているのです。その派が勝利すれば、我々は破滅することでしょう。」（1790年7月17日に書かれた書簡〔ゴーフリディー宛？〕

² 封印状（封印逮捕状）のこと。裁判抜きで、罪名も拘引期間も明示せず、国王の署名だけで逮捕・監禁できる、絶対王政を象徴するものの一つであった。サドがヴァンセンヌ、バステュー、シャラントン精神病院とつづく約一一年半の幽閉生活を余儀なくされたのも、この封印状による。

³ 当時、立憲議会によって立憲君主制の憲法の制定準備が進められていたことを指す。同憲法は1791年9月3日に可決される（九一年憲法）。

⁴ ドラ（1734―1780）の五幕韻文悲劇。本文で述べられているエピソードについては不詳。

⁵ 王妃マリー=アントワネットのこと。この後に述べられている「彼女の祖国」とはオーストリア。